

# もう一つのアメリカ・ルネサンス—— マーガレット・フラートとボストンの超絶主義的女性たち

庄 司 宏 子

## 序

1830年代後半に、ボストン、プロヴィデンス、ニューヨークなどに浸透するメスメリズムが怪しげな術と考えられながらも、アメリカ・ルネサンスの代表的な作家ナサニエル・ホーソーンやエドガー・アラン・ポーなどの作家たちの想像力と、その文学的創造に大きな役割を果たしたことは、Maria Tatarを始めとして、質量ともに相当な研究がこれまでになされている。登場人物の心理描写はもちろんのこと、キャラクター形成、行動や心理、また語りの構造にメスメリズムの影響を捉えようとする研究は、特に1990年代を中心に盛んになされ、代表的なものにRobert C. FullerやSamuel Chase Coaleなどの著作があり、また同時代のイギリスの文学や文化に及ぼしたメスメリズムの影響としてはAlison Winterによる大著がある。<sup>1</sup>

そうしたアメリカ・ルネサンスの文学とメスメリズムの研究、特にNathaniel Hawthorneの文学に及ぼした影響関係から浮かび上がってくるのは、身体的・性的な魅力に富んだメスメリストが若い女性を食い物にするといった、Maria Tatarの論のタイトルを借りるなら「主人と奴隷」という表現に端的に集約されるイメージである。ホーソーンが描くEthan BrandとEsther、Matthew MauleとAlice Pyncheon、WesterveltとPriscillaとの関係に見て取れるように、圧倒的な男性的魅力をもつメスメリストに支配される霊媒の少女たちを形容するのは「肉体を持たない」とか「血の気が薄い」という言葉である。こうした表現は、彼女たちの“nervous”な体質を意味するもので、そうした女性は磁気力の影響を受けやすいという、女性の受動性や劣性を強調する当時のジェンダー観を反映したものと考えられる。

ホーソーンなどの小説に描かれたメスメリズム、およびそこに現れる主人と奴隷というステレオタイプ的な男女の姿は、その固定的なジェンダー観と役割描写ゆえに、イデオロギー的に歪められているという印象は否めない。ひとたびフィクションの世界を離れて、1830年代、40年代メスメリズムが新奇の術として浸透した時代にこれに傾倒した人々、特に女性たちが書き記した日記や手紙を紐解くと、そこにはメスメリズムの異なる側面が垣間見えてくるからである。<sup>2</sup>

女性たちにとってメスメリズムは決して男性からの搾取ではなく、またフィクションでは男性メスメリストのイメージが定着しているが、メスメリストは男性に限られていたわけでもない。当時は女性のメスメリストが数多く存在していた。女性にとってメスメリズム体験とは心地よいhealingであったが、それに留まるものではなかった。女性霊媒を迎えた私的集まりがしばしば催

され、女性とメスメリズムとの関わりは真面目な議論の対象であった。そうした議論の場では、メスメリズムが単なる healing の領域を超えて、女性たちが自分の身体と対話し、社会との関係を見つめ直す契機となっていたことが窺える。

ホーソーンは、アメリカ・ルネサンスを代表する作家の中でも最もその文学にメスメリズムの要素を取り込んだ作家であるが、彼の実人生にはメスメリズムに傾倒した女性たちが数多く存在している。まずは妻のソファイアである。結婚前のソファイア・ピーボディがその頭痛治療のためにメスメリズムに頼っていたことはよく知られており、そのことにホーソーンが強い反感と不安を抱いていたことは、彼が Brook Farm から未来の妻に書いた手紙が伝えている。ソファイアの姉 Elizabeth Peabody も 1836 年にニュー・イングランドにメスメリズムがもたらされると熱心に講演に出席し、いち早くその信奉者となっていた。<sup>3</sup> また Peabody 姉妹の友人でソファイアにメスメリズム治療を施していた Connie Park (Cornelia Hall) という女性は Brook Farm でもあったことがわかっており、最近出版されたピーボディ姉妹の友人 Caroline Healey Dall の日記から、この Connie Park は当時ホーソーンの *The Blithedale Romance* に描かれたゼノビアのモデルと目されていたことが判明している。<sup>4</sup>

そして本稿で考察の中心となるマーガレット・フラーもまた、Peabody 姉妹と同じくメスメリズムに傾倒したボストンの進歩的女性の一人であり、このグループを牽引した人物であるといえる。フラーは友人の Clarke 姉弟 (Sarah Clarke, James Freeman Clarke) とともにエマソンも参加したことがあるという mesmeric experiment を、ある時期熱心に開いていたことを、フラーとエマソンとの間で交わされた手紙は伝えている。またホーソーンとソファイアが初めてマーガレット・フラーに出会ったのも、先に述べた Connie Park が開いたパーティの場 (1839 年 10 月末) であったことが、ソファイアの手紙に記されている。マーガレット・フラー、ピーボディ姉妹、コニー・パーク、サラ・クラーク——こうした女性たちは、フラーが 1839 年から 44 年までの間、Transcendentalist たちの拠点であった場所——エリザベス・ピーボディの West Street bookstore ——で行った連続講演 “Conversations” に参加したメンバーであり、1841 年からの Brook Farm 運動に参加したメンバーとも重なっている。このことは 1830 年代末から 40 年半ばにかけてボストンには、メスメリズムを信奉する進歩的な女性たちのネットワークが存在していたらしいということを示唆させる。本稿がマーガレット・フラーに焦点を当てる理由は、彼女をボストンのメスメリズムをめぐる女性のネットワークの中心に存在し、それを組織し、メスメリズムを独特のフェミニズム思想へと理論化した人物として注目するからである。

最近、Transcendentalism をエマソンやソローを中心にして見るのではなく、これに関わった女性の経験として捉え直そうとする研究が登場しつつある。そうした研究の一つにピーボディ姉妹の新たな伝記の出版があり、姉妹の人生と Transcendentalism との関わりが注目されている。<sup>5</sup> 本稿もアンテベラム期の Transcendentalism や Romanticism をこれに関わった女性の視点から捉え直すという研究の枠組みの中に属するものであるが、そこにメスメリズムという要素を盛り込み、それ

とボストンの Transcendental women たちとの関わりを捉え、その関わりから何が生まれたのかを考察したい。女性の神経症的身体、メスメリズム、フェミニズムの三つが 1840 年代のボストンの Transcendentalism の文化の中で結びつくこと、“nervous”な女性たちがメスメリズムに触れる中で、新たな女性像を見出し、そこから女性と社会の関係を見直すフェミニズム思想に繋げていくことを、フラーの一連の著作に現れた女性像とメスメリズムとの関わりを追いながら、そこにアンテベラム期のアメリカ文化史の側面を捉え、もう一つのアメリカ・ルネサンスの姿を描き出してみたい。

### 「ヴィクトリア時代の病者 (“Victorian Invalidism”)

そもそもフラーやソファリアなど、ボストンの女性たちはなぜメスメリズムに傾倒したのであるうか。エマソンはフラーに関して「生涯、病と痛みの犠牲者であった」と述べている (Memoirs I: 178)。またソファリアは 10 代の半ばから苦しんだという、すさまじい nervous headache についてその日記に印象的な言葉で綴っている。

All day yesterday my head raged, and I sat a passive subject for the various corkscrews, borers, pincers, daggers, squibs and bombs to effect their will upon it. Always I occupy myself with trying to penetrate the mystery of pain. Sceptics surely cannot disbelieve in one thing invisible, and that is *Pain*. Toward night my head was relieved, and I seemed let down from a weary height full of points into a quiet green valley, upon velvet turf. It was as if I had fought a fight all day and got through. (original italics, qtd., Herbert, 38)

19 世紀半ばヴィクトリア時代の女性の「神経衰弱 (nervousness)」については、当時の小説や医学書にあまり描かれ、Elaine Showalter, Carroll Smith-Rosenberg などフェミニスト歴史家による一連の研究により “Victorian Invalid” という語は神話的な響きすら帯びている。通常中産階級の女性に限定されて論じられるこの病については、階級やジェンダーに関する社会的な要因、心理的な要因、また当時のアロパシー療法によって今日では考えられないような劇薬が治療に用いられていたという医学的要因に至るまで、さまざまに論じられている。そうした数多くの研究にも関わらず、その実体がすり抜けていく観のある、“Victorian Invalid” とは一体何なのであろうか。

“Victorian Invalid” の表象研究は、ヴィクトリア時代の女性性と身体をめぐる強固な文化のファンタジーを作り上げることとなった。しかし、病と女性を外から眺めるのではなく、当の女性たち自身が記した日記や手紙を紐解くと、そこから彼女たちが痛みに悩まされる自らの身体とどのように向き合っていたのか、女性と nervousness との驚くべき関係を見出すことができるのである。

### 女性の超絶主義的身体観

そうした例をまずソファリアの *The Cuba Journal* に見ていこう。ホーソンと結婚する以前の

ソファイア・ピーボディは頭痛治療 (nervous migraine) のため、Dr. Walter Channing など数名のボストンの有名な医師たち——Dr. Hubbard, Dr. Shattuck, Dr. Wesselhoeft 等の治療を受けていた。この Dr. Channing とは、Unitarian 派の牧師で Transcendentalism の初期の指導者である William Ellery Channing の従弟であり、治療にあたるだけでなく、ソファイアの Transcendentalist 的な感覚の形成に大きな影響を与えていたことが彼女の日記から窺える。彼女は頭痛治療のため、投薬、キューバの Dr. Robert Morell のコーヒー・プランテーション “La Recompensa” への転地療養 (1833-35 年)、そして後にはメスメリズムに至るまで、さまざまな療法を試している。ソファイアがキューバへの転地療養中に故郷に書き送った手紙は、今日 *The Cuba Journal* として読むことができるが、これは彼女の「初期の Transcendentalist 的な精神性 (“the earliest public exponents of transcendentalist spirituality”）」(Herbert 51) を示す書き物として注目される。この日記は、ソファイアが頭痛を「体を蝕む」というよりは、「精神を純化する」ものと考えていたことを伝える。病を「呪い」ではなく、「祝福 (“the very great blessing of sickness”）」(250) と呼ぶソファイアの言葉は、女性の病と身体に関する従来の見方を打ち砕くものであるが、そうした特異な身体観を語るものとして『キューバ・ジャーナル』から次の日記の一節を挙げたい。

I believe I understand in a degree the very great blessing of sickness.... But the coming years of 'Health' never can be so dear to me as the past years of suffering—I shall go back to them as I would enter the inner chamber of the tabernacle where the throne & the ark ... were filled with the presence & commands of the Invisible GOD-& nothing visible or earthly can ever come into competition with the essentially lasting & real.... I feel a noise at the very centre of my heart & my brain-. We are indeed fearfully & wonderfully made, & no one can know how fearfully till they are sensitive in the nicest parts of this wonderful machinery-If I had been nervous in the common acceptation of the term, I think I should not only have been mad, but afraid to move or feel-Perhaps it is more just to say, if I had not had a [-real] sense of GOD & of the calmness which is associated with the thought of Him-I have realized Him as an anchor-for in the extremity of my suffering when I was conscious of a floating off of my senses-a resolute fixing of my mind upon immutable-never changing essence ... has enabled me to regain my balance so entirely that I feel as if I had had direct revelations to my own mind of the existence of such a Being. (250-253, entry for Monday, August 11th 1834; original emphasis)

ここでソファイアは極度の痛みの最中に、肉体が五感を離れて浮遊し、純粋な精神となる感覚を語っている。痛みの中で、彼女の精神は永遠の存在と一体化し、不変の本質——神——が直接顕現する感覚を味わう。ソファイアは自らの身体を音や光に敏感な「素晴らしい機械」に譬えており、

その身体は Transcendental な領域に到達する手段となる。ソファイアの身体観は、女性の nervous な身体と Transcendentalism との意外な接続性・親和性を伝えてくれる。またソファイアは、頭痛の徴候は「不思議な精神の高揚」(a “singular elation of mind”) で始まり、その後「肉体のあらゆる部分が覚醒し (“every inch of me was awake”）」、「その中で超自然の力に突き動かされている (“driven by a “supernatural force”）」感覚を味わい、「ヘブライ語でもヒエログリフでも読めるような感じがする (“I could study Hebrew or hieroglyphics…”）」とも書いている (Marshall 220)。

ソファイアが記したような、極度の痛みの中で味わう精神の高揚については、フラーも同様な感覚を記している。

“Beneath all pain inflicted by Nature, by not only serene, but more; let it avail thee in prayer. Put up, at the moment of greatest suffering, a prayer; not for thy own escape, but for the enfranchisement of some being dear to thee, and the Sovereign Spirit will accept thy ransom.” (Fuller *Memoirs* II 90)

それは「狂おしいような痛みの瞬間に」祈りを捧げ、「至高の精神」に受け止めてもらうという感覚として表現される。フラーもまた、「痛みが知的な能力を研ぎ澄ますこと、病気のと時の方が物事をよりよく理解でき、難しい本を読むことができる」といったような、ソファイアと同様な痛みの中に顕現する精神の拡張を語っている (Capper 32)。ソファイアとフラーの日記から窺えるのは、病や痛みを通じて至高の存在に出会うという、彼女たちが自らの nervous な身体に対して与える超越主義的な解釈である。

19世紀の女性の病と身体の研究については、先に述べたように Showalter, Smith-Rosenberg, Barbara Ehrenrich, Deirdre English, Diane Price Herndl 等によって、一大研究ジャンルが築かれており、女性の病と当時の支配文化との関わりにおいて解釈が分かれている部分もあるが、nervousness や hysteria といった女性の invalidism とは「女性はいかに弱く無力な存在とする家父長制による女性の身体の定義 (“weak, lacking power, powerless”）」であるという見方については、大方一致しているように思われる。そして病と女性を結びつけることが separate spheres という中産階級の固定的なジェンダー・イデオロギーを支える中核となったことが示されている。しかし、先にみたソファイアやフラー自身の言葉から、「病」は powerlessness の徴ではなく、逆に power の感覚を彼女たちに与えていたことがわかる。

ソファイアやフラーなど、メスメリズムに傾倒したボストンの女性たちの nervousness は、従来のフェミニスト文化史家の解釈に収まるものではない。また最近の Victorian Invalid についての文化研究は、Harriet Martineau の例などを挙げて、女性たちは the separate spheres のイデオロギーを宙づりにするものとして、病を積極的に利用していたとし、ヴィクトリア時代の女性のしたたかな “sickroom strategy” を論じているが、ソファイアやフラーの例はそうした例とも異なる。まし

てや nervousness を “fashionable disease” として中産階級的な有閑の徴とみる見方は、彼女たちに関してはおよそ見当違いなものといえるだろう。<sup>6</sup>

ソファイアやフラーには、病を女性の「生物学的な宿命」とか、女性の受動性や劣性とする考え方はない。また当時の中産階級の理想とされた女性像 “passionless woman” に見られるような身体性の消去とも無縁である。むしろフラーやソファイアの言葉から窺えるのは、自らの病の身体に耳を澄ませ、痛みを通じて自らの身体の主体となるという感覚である。むしろ、病の身体を超越的なものへのアクセスの手段として、あるいは至高の存在と “communicate” する手段として欲望している趣すらある。痛みに対して sensitive な身体を、女性性と結びつける考え方は見られるが、それは彼女たちを private sphere という狭い領域に閉じ込めるものではなく、そこからの解放の感覚をもたらしている。こうした身体観は、女性たちによるもう一つの Transcendentalism として明らかにすべき経験や運動の土台となるものであり、nervousness は「肉体を超越した精神の拡張」や「精神的な力」の感覚という、男性的な言説で語られる新しいポジティブな価値を帯びている。

何故こうした彼女たちの nervous な身体と Transcendentalism との接続が可能になるのであろうか。それについても、ソファイアが語る頭痛の原因がヒントを与えてくれる。ソファイアは自らの頭痛は、“od” という物質によって誘導されると考えていた。“od” とはドイツの自然科学者 Freiherr Carl von Reichenbach が唱えたもので、外界にあまねく存在しているエネルギーを表す (Herbert 28)。ソファイアのこの考え方は、頭痛は外からやってくるもの、すなわち、神秘的な流体を体内に引き入れる神経の感受性 (nervous susceptibility) を通じて起こるというもので、この時代特有の、ロマンティックな頭痛観といえる。こうした頭痛のもとでは、nervous な身体とは神秘的な流体への過度の感受性のことを意味している。

“od” とはメスメリズムの用語の「磁氣的流体」(magnetic fluid) に等しいものとされていたことを考えると、“nervous” な身体とは「神経質」な身体ではなく、文字通り「神経組織」を備えた身体を意味し、メスメリズムの流体に感応する優れた「神経回路」をもつ身体といえる。そして実際、フラーは女性の “nervous” な身体のメスメリズムへの感受性を力強く語っている。

1895年に、Ednah Cheney という女性が、半世紀前に自らも経験した1840年代の Transcendentalism とフラーの影響を振り返り、フラーは決して「例外的な存在だったわけではなく、典型」であったと語っている (Wayne 16)。この言葉は、フラーという存在もそのフェミニズム思想も、決して時代を突出した単独のものではなく、当時のボストンの進歩的な女性が抱いていた考えを集約するものであるとする見方を与えてくれる。この見方に準拠しながら、フラーが提示する女性の身体、身体とメスメリズムとの関わり、それをフェミニズムへと展開する思想を、当時のボストンの Transcendental women の考え方を反映したものとして、以下にその著作と、実生活でのメスメリズム体験との双方を通じて見ていく。



## フラーのメスメリズムとフェミニズム

フラーは1845年出版の *Woman in the Nineteenth Century* を初めとして、エッセイや旅行記などの著書の中で、19世紀の理想的な女性像を描いている。「19世紀の女性」とはフラーにとって「新しい女性」ないし「近未来の女性」というほどの意味であるが、この女性像を基盤として、彼女は女性と社会との関係の変革を唱えていく。フラーが唱える19世紀の新しい女性像の根底にあるイメージとは、メスメリズムの霊媒のイメージであること、その優れた「神経の感受性」の中にフラーが見いだした女性の可能性を以下に論じていく。<sup>7</sup>

フラーのメスメリズムとの出会い、特にトランス状態で霊媒が示す驚くべき能力は強いインパクトを彼女に与え、そのフェミニズム思想に大きなインスピレーションを与えることとなる。しかしながらフラーの死後、アメリカ・ルネサンスの中でメスメリズムの文学的利用は続くが、そこではフラーが描いたような生き生きとしたパワフルな霊媒の姿は消去されていく。現在の文学史においては消去されたフラーを初めとする超絶主義的女性とメスメリズムとの関わりを、女性たちによるもう一つのアメリカ・ルネサンスの中核をなすものとして以下に提示してみたい。

### “Leila” (1841)

フラーのエッセイで、初めて女性の nervousness とメスメリズムとを繋げたと思われる女性像が登場するのは、1841年4月に自らが編集する *The Dial* に発表した “Leila” という神秘的な散文詩、ないし詩的エッセイともいべき作品においてである。そこでは Leila という神秘的な女神像が描かれている。主人公が Leila に会うシーンは次のようなものである。

I have seen her among the Sylphs' faint florescent forms that hangs in the edges of life's rainbows. She is very fair, thus, Leila; and I catch, though edgewise, and sharp-glowing as a sword, that bears down my sight, the peculiar light which she will be when she finds the haven of herself... Leila is too deep a being to be known in smile or tear... should she ever be detected it will be in the central secret of law. Breathless is my ecstasy as I pursue her in this region. I grasp to detain what I love, and swoon and wake and sigh again... This sylph nature pierces through the smile of childhood. There is a moment of frail virginity on which it has set its seal, a silver star which may at any moment withdraw and leave a furrow on the brow it decked... They say that such purity is the seal of death. It is so; the condition of this ecstasy is, that it seems to die every moment, and even Leila has not force to die often; the electricity accumulates many days before the wild one comes, which leads to these sylph nights of tearful sweetness.

After one of these, I find her always to have retreated into the secret veins of earth... she walks on the surface of earth; the blood-red, heart's-blood-red of the carbuncle. She is, like

it, her own light, and beats with the universal heart, with no care except to circulate as the vital fluid.... (Fuller *The Essential Margaret Fuller* 55, emphasis added)

ここで主人公が Leila に遭遇する場面の描写には、“ecstasy, electricity accumulates, sylph, vital fluid” などメスメリズムを連想させる用語がふんだんに用いられている。この場合“ecstasy”とは、メスメリズムの用語、霊媒が示すトランス状態を意味する。

Leila とは“ecstasy”を誘導する「生命の流体」であり、トランスの眠りの中で見える光と記されている。<sup>8</sup> ここで鍵となる記述は、フラーに限りなく近い人物と考えられる主人公と Leila との遭遇は、「電気が」「何日前から蓄積された」後の激しい“ecstasy”の中で起こると書かれている部分である。当時の医学では、ある部分が痛むとはそこに電気が蓄積されたため起こると考えられていた。<sup>9</sup> とすると、主人公が会おう Leila とは、「数日間の」電気の蓄積、つまり激しい頭痛の痛みを味わった後、メスメリズムを通じてトランス状態に入り、霊媒へと変化した自らの姿と解釈することができる。

またこの詩の中で、Leila のパワーは“carbuncle”という神秘的な赤い宝石で象徴されているが、この“carbuncle”とは一体何を意味するのか、この言葉がフラーのメスメリズム体験を集約する言葉であることは、この詩の創作にいたるまでの過程で記された、彼女の記録の中に探ることができる。

何人かのフラー研究者や伝記作家たちは、1840年9月か10月頃にフラーに精神的な変化があったことを指摘している (Manson 310)。そして、その経験が彼女の著作において「新しい言語の核となった」と論じる (Steele 71)。フラーは、その時に体験した精神的変化について当時親しい友人 Caroline Sturgis に宛てた 1840年9月8日付の手紙の中で、「カーバンクルを見つけた (“the carbuncle is found”)」と、シンボリックに表現している。

... I live, I am—*The carbuncle is found* And at present the mere sight of my talisman is enough. The hour may come when I wish to charm with it, but not yet. I have no future, as no past.... (Fuller *Letters* II 157, emphasis added)

後にフラー自身はこの時の経験を振り返って、「私の精神生活に光を与えるもの (“the era of illumination in my mental life”）」であり、私の「体質に起こったクリーゼ (“a crisis in my constitution”）」であったと書いている (Fuller *Letters* III 55)。

この時期にフラーが経験した精神的変化がどういうものであったのか、フラーはそのことを「すっかり書くつもりだ (“If I live I shall write a full account of all I have observed.”) [Letters III 55]」と言いつつ、実際に書き残してはいない。しかしこの時の経験を断片的に記した彼女の手紙や、この時の経験を象徴する“carbuncle”という単語の作品への転用から、それがメスメリズムに関わる



体験であったであろうことが推察されるのである。その部分を引用してみよう。

Of the mighty changes in my spiritual life I do not wish to speak, yet surely you cannot be ignorant of them. All has been revealed, all foreshown yet I know it not. Experiment has given place to certainty, pride to obedience, thought to love, and truth is lost in beauty... (Fuller *Letters* II 158. To Caroline Sturgis, 26 Sept. 1840)

This love was a key which unlocked for me many a treasure which I still possess, it was the carbuncle (emblematic gem) which cast light into many of the darkest caverns of human nature. (Fuller "On Anna Barker" *The Essential MF* 23)

上記の引用の“carbuncle”という語は、他者との affinity (sympathy ともいう) の状態に至ったメスメリズム的状况の中で得られる、相手の心理へのアクセスを表している。

言葉や身振りなど通常的手段に拠らないで「暗い洞窟」に光を当てる、つまり無意識、他者の心の底に隠された心理へ到達する赤いもの、といえはホーソーンが描いた *The Scarlet Letter* の Hester Prynne が身につける「緋文字」が想起される。緋文字によって「新しい感覚 (“a new sense,” 86)」を得たヘスタは、内に罪を隠し持った者がそばを通ると、胸の「赤い不名誉の徴 (“the red infamy,” 87)」が「共感の動機 (“a sympathetic throb,” 87)」を打ち始めるのを感じる。フラーとホーソーンが人間の心の奥底に隠された秘密、その心理を表すのに「暗い洞窟 (“a dark cavern,” 124)」というメタファーばかりではなく、“carbuncle” や “the scarlet letter” という、赤い魔術的な「タリズマン (“talisman”）」の概念も共有していることは注目に値する。

フラーがエッセイ “Leila” の中で描いていた、“carbuncle” の女性リーラとは、メスメリズム的 affinity によって相手の心理への交流の回路を開かれた状態を表している。リーラは激しい頭痛の末に自らエクスタシー (トランス状態) に至り、その中で透視などの能力を獲得するが、そのイメージの源泉となっているのはメスメリズムの霊媒の姿である。この霊媒のイメージは、その後フラーがそのフェミニズム思想を表したエッセイ *The Great Lawsuit* (1843) やそれを拡大した *Woman in the Nineteenth Century* (1845)、及び旅行記 *Summer on the Lakes* (1844) の中で展開する女性像の原型となるものであるが、それを論じる前に、フラーの実生活における霊媒との出会いについて見てみたいと思う。

### 霊媒の電氣的身体

フラーが実人生で初めて霊媒といわれる女性に遭遇するのは、1837年9月末、プロヴィデンスにおいてであった。当時フラーはこの地で教師をしており、女性としては破格の1000ドルを得ていた (この年収は、ハーヴァードの教授とほぼ同じ、駆け出しの牧師よりも多い年収だったと言わ

れている)。フラーは、友人の James Freeman Clarke とともに Loraina Brackett という霊媒に会いに行ったことが、両者の手紙や日記に書かれている（詳細は Clarke の日記に記されているが、この Loraina Brackett はかなり有名な霊媒であった）。この出来事がフラーの最初のメスメリズム体験と目される。

19世紀前半のプロヴィデンスは、文芸に関してはボストンの田舎版という形容がなされる一方で、「ニューイングランドで最も進歩的な都市」とも言われており、ボストンの文化的な権威にとってはカルト的で危険、低俗で滑稽なものと思われていた骨相学、メスメリズム、菜食主義、そして超絶主義等がこの地では、文化的エリート達の間で受け入れられていた。フラーがプロヴィデンスでメスメリズムを体験するというのは、ちょうど時代のタイミングにぴったりあったものと言えるが、この時の体験からメスメリズムに大いなる関心を抱くようになったフラーは、ちょうど同じ時期にプロヴィデンスの医師 Thomas C. Hartshorn によって翻訳されたばかりの DeLeuze の *Practical Instruction in Animal Magnetism* をさっそく読んでいた。この本はメスメリズムのマニュアル本として当時よく読まれた本で、同じく治療にメスメリズムを用いていた Harriet Martineau (1802-76) も施術の仕方をこの本から学んだと言われている。

この Deleuze の本には somnambulist（霊媒）について次のような記述が見られる。

There is in most somnambulists a development of sensibility, of which we can have no conception. They are susceptible of receiving influence from every thing that surrounds them, and principally from living beings. They are not only affected by physical emanations, or the effluvia of living bodies, but also, to a degree much more surprising, by the thoughts and sentiments of those who surround them, or who are busy with them. (77)

霊媒とは、回りの人間の思考や感情、また外界の事物からの感応を受け取る高度な感受性を備えた身体であると書かれている。上述のソファイアは、ヴィクトリア時代の nervous な女性が自らの身体に関して、外界からの磁気的な流体を受け止める優れた感受性をもっていると考えていたが、この時代、感受性（それは、刺激の、神経を通じた体内への伝達を意味した）とは「電気」であると考えられていた。<sup>10</sup> 感受性を電気と同一視する見方は、フラー自身が霊媒の身体について書いたものの中にも現れている。

... the somnambulatory trance was only a form of the higher development, the sensibility to more subtle influences—in the terms of Mr. Grimes, a susceptibility to etherium. (Fuller *Life Without and Life Within* 173)

“etherium”とはメスメリズムの催眠やトランスを誘導する“universal fluid”のことで、電気、磁気、

光を通じて作動すると考えられていたものである (Grimes 74)。フラーは、その後の著作の中で、「電気」という言葉を女性の身体を形容する言葉として多く用いているが、それは電氣的身体としての霊媒——感応への感知力を高度に発達させた霊媒の身体を、直接的には指すものである。<sup>11</sup>

メスマリズムを介して女性の身体を電気に譬える表現は、フラーばかりでなく、エリザベス・ピーボディなど Transcendentalism のボストンに身をおく他の女性たちもまた同様な表現をしている。エリザベス・ピーボディは自らの身体を、「相当に磁氣化された身体」とであると語っている。ソファアアの頭痛を治療した女性メスマリストとして知られる前述のコニー・パークもまた自らを「真の磁氣力」の持ち主と称している。<sup>12</sup>

1837年9月のプロヴィデンスにおけるメスマリズム体験、霊媒および Deleuze の本との出会いは、その後フラーが霊媒 (somnambulist) のイメージに基づく「電氣的」女性像、それを彼女独自のフェミニズム思想へと発展させていく出発点となったといえる。

フラーが次に、その著作の中で、霊媒をイメージとする女性像を描くのは、1843年7月の *Dial* 誌上に発表されたエッセイ “The Great Lawsuit” においてである。このフラーによる、最初のフェミニスト宣言といえるエッセイの中には、「リーラ」からさらに発展した霊媒のイメージに基づく女性像が、“Ecstatica” という名前を得て登場する。この Ecstatica には、彼女の明確なフェミニスト・メッセージが込められている。女性の生を制限する当時の支配文化センチメンタリズムへの批判がそれである。

### フラーの電氣的身体論——“Ecstatica”

“The Great Lawsuit” において Ecstatica が登場するくだりは、次のようなものである。

If larger intellectual resources began to be deemed necessary to woman, still more is a spiritual dignity in her.... Joanna Southcote, and Mother Anne Lee are sure of a band of disciples; Ecstatica, Dolorosa, of enraptured believers who will visit them in their lowly huts, and wait for hours to revere them in their trances.... To this region, however misunderstood, and ill-developed, belong the phenomena of Magnetism, or Mesmerism, as it is now often called, where the trance of Ecstatica purports to be produced by the agency of one human being on another, instead of, as in her case, direct from the spirit.... The electrical, the magnetic element in woman has not been fairly developed at any period. Everything might be expected from it; she has far more of it than man. This is commonly expressed by saying, that her intuitions are more rapid and more correct (*The Dial*, vol. IV July 1843, 37-38, emphasis added)

Ecstatica の語源は不明であるが、おそらく “ecstasy” という語に由来するフラーの造語であ

ると考えられる（「自らの力で自然に“ecstasy”に入ることができる者」の意であろう）。ここでは Joanna Southcote や Mother Ann Lee といった、イギリスの宗教的指導者の女性が呼び水となって、Ecstatica という抽象的な女性像が導き出され、magnetism やメスメリズムも言及されている。Ecstatica がそのトランス状態で唱える託宣を聞こうと人々が集まってくること、メスメリズムでは通常トランスとはある人間が別の人間の上に引き起こすものだが、Ecstatica は精霊によって自らトランス状態に入ることができるとも書かれている。つまり Ecstatica とはメスメリストの手を借りず、自ら“ecstasy”に入ることができ、その中で予言や予知を行う存在とされる。フラーは Ecstatica を「女性の電氣的・磁氣的要素」をふんだんに持つ女性として描出するが、女性の方が男性よりも電氣的であると言い、電氣的であるとは、「より速く、より正確な知覚力、洞察力」をもつことだと述べている。

このように *The Great Lawsuit* に現れた女性像、メスメリズムの霊媒を基盤とし、拡張された知覚力や洞察力をもつ女性像 Ecstatica は、*The Great Lawsuit* 以降、これを拡大して 1845 年 2 月に出版された *Woman in the Nineteenth Century* においては、一層女性の nervous な身体性が強調され、それがメスメリズムを経由して spiritual な精神性、つまり Ecstatica へと飛翔する姿へと変貌する。また *Woman in the Nineteenth Century* においては、Ecstatica という女性像を、同時代の女性の文化的規範である“The True Woman”と対照させることで、当時支配的なセンチメンタリズム文化を批判する姿勢もはっきりと現れている。

The spiritual tendency is towards the elevation of woman.... Then women of genius, even more than men, are likely to be enslaved by an impassioned sensibility. The world repels them more rudely, and they are of weaker bodily frame. Those, who seem overladen with electricity, frighten those around them.... whose depth of eye and powerful motion announced the conductor of the mysterious fluid.... Yet, allow room enough, and the electric fluid will be found to invigorate and embellish, not destroy life.... Sickness is the frequent result of this overcharged existence. To this region, however misunderstood, or interpreted with presumptuous carelessness, belong the phenomena of magnetism, or mesmerism, as it is now often called, where the trance of the Ecstatica purports to be produced by the agency of one human being on another, instead of, as in her case, direct from spirit.... They [women] ... must retain the same nervous susceptibility, while their physical structure is such as it is. (60-62, emphasis added)

Ecstatica に関して、*The Great Lawsuit* の記述と *Woman in the Nineteenth Century* の記述を比較すると、両者の間でこの女性像がどのように拡大されたかがわかる。引用部の下線を引いた箇所は、“The Great Lawsuit”には現れないが、*Woman in the Nineteenth Century* には書かれて

いる重要な語句を示している。女性の電氣的性質は「興奮しやすい感受性や感度の高い神経系（“impassioned sensibility”や“nervous susceptibility”）」という女性の身体構造と関わっていることが述べられている。sensibilityとは、電氣的に刺激を伝える神経と考えられていたが、女性の繊細な神経がその電氣的資質の元となっていること、そして過剰な電氣的性質と病との関係が導き出される。こうして *Woman in the Nineteenth Century* においては“nervous woman”がメスメリズムに身を委ね、トランス状態の中で Ecstatica へと変態していく様が描き出される。

フラーより半世紀前に生まれたイギリスのフェミニスト Mary Wollstonecraft、神経医学の台頭の時代に生きた彼女は、“sensibility”の強調は女性性をいたずらに身体性に閉じ込めるものとして、これに価値を見出すことはなかった。しかしフラーはメスメリズムを通じて電氣の概念を得ることで、sensibilityに積極的な価値をおき、女性の身体性から同時代の社会に対するフェミニスト的批判に展開させている。

霊媒 Ecstatica の電氣的身体が、フラーのフェミニズム思想にどのように結実するのか、それは *Woman in the Nineteenth Century* の中でも、フラーの言葉と意識が最も高揚した部分に現れる。

The especial genius of woman I believe to be electrical in movement, intuitive in function, spiritual in tendency... In so far as the soul is in her completely developed, all soul is the same.... Such may be the especially feminine element, spoken of as Femality. But it is no more the order of nature that it should be incarnated pure in any form, than that the masculine energy should exist unmingled with it in any form.

Male and female represent the two sides of the great radical dualism. But, in fact, they are perpetually passing into one another. Fluid hardens to solid, solid rushed to fluid. There is no wholly masculine man, no purely feminine woman.

History jeers at the attempts of physiologists to bind great original laws by the forms which flow from them. They make a rule; they say from observation, what can and cannot be. In vain! Nature provides exceptions to every rule.... She enables people to read with the top pf the head, and see with the pit of stomach. Presently she will make a female Newton, and a male Syren.

Man partakes of the feminine in the Apollo, woman of the masculine as Minerva. (68-69, emphasis added)

フラーは女性の天賦の才とは、「電氣的、直感的、精神的」であることだと断言する。この三つは同じ性質を表しており、一個の魂が発展した究極の姿として描かれている。そこに女性の nervousness の影は微塵もない。またフラーは「電氣的、直感的、精神的」という性質は feminine element ではあるが、それは女性という固有の“form”（「身体という器」——今の用語だと生物

学的性差に相当する概念と考えられる)に宿るものではないとして、当時としては画期的な sex と gender の切り離しという考えに至っている。フラーにとって女性的、男性的 (female/male, feminine/masculine) という性質は、固有の性差に由来するものではなく、相互に融合が可能な磁石の両極のようなものとして捉えられている。引用部に「生理学」への言及が見られるが、医学言説も借用しながら女性の身体を生物学的運命としてその劣性を説くジェンダー観とそれと結びついたセンチメンタリズム文化が主流をなす時代にあつて、身体とジェンダーを単純に結びつける考え方をあっさり切り崩すフラーの考えはラディカルといえる。フラーの提唱する Ecstatica とは、その拘束的な身体観からの解放と、女性の身体と女性的とされていた性質 (今日では sex と gender) の切り離しというメッセージによって、同時代のセンチメンタリズム——その文化のもとでは、女性性、その美徳もそのエクリチュールも女性の身体から発生するものだと考えられていた——センチメンタリズムの批判となっていることが窺える。

アンテベラム期のアメリカ・ロマンティシズムに現れた電気のモチーフについては、Walt Whitman の “I sing the Body Electric” (1819-92, *Leaves of Grass*, 初版 1855 に所収) がつとに知られている。そこでは、電氣的な絆で互いに繋がる人々が登場し、その連帯から成るデモクラシーのアメリカ国家が、Body Electric (電氣的国家) として幻視されている。ホイットマンのこの電気のイメージもまた、メスメリズムの影響を受けたものであるが、ホイットマンが謳った電氣的な個人の身体から構成される国家の身体とともに、フラーが “The Great Lawsuit” や *Woman in the Nineteenth Century* で描き出した Ecstatica という女性版の「電氣的身体」もまた、アメリカ・ロマンティシズムのもう一つの産物として評価していくべきであるだろう。

### フラーとエマソン、およびブルック・ファーム

フラーの “Ecstatica” およびそれに基づく社会批評は、今日のサイボーグ・フェミニズムのはしりを思わせるものがある。フラーが “Ecstatica” という女性像をフェミニズム思想へと拡大していた 1843 年から 44 年は、実生活でもフラーのメスメリズムへの関心が最大となっていた時期であり、この時期、“Ecstatica” という語は著作の中ばかりではなく、フラーの私信にもよく登場している。フラーは当時、友人と “mesmeric experiments” を開くことにかなり熱中していたが、Ecstatica とはそうした実験で霊媒を指す言葉として、しばしばその手紙の中に現れる。そしてその実験はエマソンをも巻き込むものであった。

My dear Waldo

... At James Clarke's there are to be, next Monday evening *Mesmeric* experiments of reading letters &c tried on the same Lady of whom I wrote you in my last. Sarah desires me to invite your presence, in case you shall or can be in town so early as Monday. No one is to be there but myself and S. and A. with whom I am staying. (Boston, 2d Feby, 1844; *Letters of*



*Margaret Fuller*, vol. III, 180)

Sarah Clarke had fully intended to invite our new Ecstatica for Monday Evening, and submit to your eye the same revelations as to ours, when she was informed by Caroline that you had spoken of such experiments as “peeping through the keyhole,” and such like. ([14? February?] 1844, 181)

ここでフラーはこの時期、ボストンの親しい友人としばしば開いていた「メスメリズムの夕べ」にエマソンを招待しようとしている。手紙はメスメリズムに対して「鍵穴から(他人の心理、秘密を)のぞき見る」ようなものだと、不信感と軽蔑の念を抱いているエマソンを軽くからかっている調子が窺える。エマソンへの手紙にある「我々の新しい“Ecstatica”」とは、フラーの友人の女性霊媒 Anna Q. T. Parsons (Marianne Dwight Orvis, *Letters from Brook Farm* にその写真が所収されている) を指している。アナ・Q・T・パーソンズはフラーの幼い頃からの友人で、フラーと同じくこの女性もブルック・ファームに多くの友がいた (Marianne Dwight Orvis など)。フラーはサラ・クラークとともに、この霊媒女性の力を「非凡なもの (“what seem to us real and uncommon powers”)」と信じ、彼女による “psychometric reading” の実験を熱心に行っていた。この実験は、名前を伏せたある人物が書いた手紙を霊媒が開封せずに両手に持つか額に当てるかして、その人物の性格を判断するというものである。そうした reading の会の一つで、フラーはエマソンや自分を実験対象としていた。

またこの時期のフラーはブルック・ファーム運動 (1841-47) に関わっている。ブルック・ファームにおいてメスメリズムがかなりさかんに行われていたことについては、後に何人かの Brook Farmer たちの回想録がそれを明らかになっている。コニー・ホール・パーク (ブルック・ファームでは Camilla と呼ばれていた) や他の女性メスメリストによる施術の様子は Georgiana Bruce Kirby による回想録 *Years of Experiences* にかなり詳しく書かれている。また Marianne Dwight Orvis, *Letters from Brook Farm* にもブルック・ファームにおける交霊会の様子が描かれている (Orvis 108)。

ブルック・ファームの Transcendentalist たちが、メスメリズムが説く、宇宙を充滿する「磁気の流体」という概念の中に、社会的調和を支える科学的根拠を見ようとしていたということ、知的ないし社会改革的な観点からメスメリズムへの関心をもっていたことも回想録から見て取ることができる。しかし、ブルック・ファーム経験がフラーのメスメリズムへの関わりにどのように影響を与えたのかについては、彼女自身も書いておらず、推測の域を出るものではない。フラーとブルック・ファームとの関わりも、ホーソーンのように (半年ほどであっても) “resident” として暮らしただけというのではなく、時折、休息と思索のため、あるいは講演をするために訪れるという “visitor” としての関わりであった。しかしフラーがブルック・ファームとの関わりによって、Ecstatica 的

な女性像を、西漸運動の時代（奴隷制、ネイティブ・アメリカン、移民、西部と女性）を見る社会批判のツールとする視点を得たのではないかということは大いに考えられることである。

前述の Ecstatica をめぐるエマソンとのやりとりから、1843 年から 44 年あたりにかけて、両者の間にはメスメリズムをめぐるかなり緊迫した議論（それはフラーの方からの一方的な議論のふっかけといえるものだが）があったことが推察される。エマソンとの関係、そしてブルック・ファームへの参加は、霊媒的女性像を新たな装いで次作 *Summer on the Lakes* (1844) に登場させる契機となったのではないかと考えられる。

### フロンティアと霊媒——“Frederica Hauffe”

フラーは *Summer on the Lakes* において Ecstatica 的な霊媒女性の姿を描いている。霊媒女性をそれまでのように神秘的なエッセイや哲学的エッセイの中で描くのではなく、初めて旅行記という大衆的ジャンルの中で同時代のアメリカ社会のコンテクストの中に置いていることは顕著な点である。

*Summer on the Lakes* は、フラーが 1843 年 5 月から 9 月まで、当時の西部地域——ナイアガラの滝、五大湖、イリノイの大草原 (Niagara Falls, the Great Lakes, the Illinois prairie など) を旅した経験に基づいている。ボストン帰郷後の 1844 年 6 月、フラーはその体験を西部旅行記として出版することとなった。

この旅行記の第 5 章 “Wisconsin” において、それまでリーラや Ecstatica という霊媒的な女性像、ないし女性の電氣的身体モチーフが再び、“Seeress of Prevorst”（プレフォルシュトの予言者）という形で現れている。この「プレフォルシュトの予言者」とは、ドイツ人の霊媒 Frederica Hauffe (1801-29) という実在の人物である。フラーはこの話を書くに当たって、旅行の合間に疲れたので数日の間休息に当て、持参していた霊媒に関する伝記を読むことにした、この部分はその本の紹介であるというような断り書きを書くことで、このエピソードの挿入が偶然であるように装っている。しかし実際には、フラーは旅行前にこの本を読み終えたと 5 月 9 日付のエマソンへの手紙で書いており、旅行中に出版された “The Great Lawsuit” (*The Dial*, 7 月に掲載) にもこの「プレフォルシュトの予言者」の話が登場するため、このエピソードの挿入は偶然などではなく、旅行記というジャンルにこのエピソードを内包させること、そして西部のフロンティア言説と女性霊媒の身体を繋げることは、フラーのフェミニズムの視点から西漸運動に沸くアメリカを論じようとするこの旅行記において、相当周到に準備されたものであったと考えられる。むしろこの西部旅行の間、フラーにとってフレデリカ・ハウフェという女性のイメージはある種の「オブセッション」となっていたのではないかとさえ疑われるのである。

当時旅行記は大衆的な文学ジャンルを形成していた。フラーが旅をした 1843 年のウィスコンシン、ミシガン、イリノイは東部からの移住者やヨーロッパからの移民の定住が進み、もはやフロンティアではなかったというものの、フラーにとっては間違いなく新しい土地であり、フラー自身

“transition state”（移行の状態）と呼ぶこの西部空間に、一見何の関連もない霊媒女性を描いてみせることの意味とは一体何だったのであろうか。

フラーが元本とした“Seeress of Prevorst”、すなわちフレデリカ・ハウフェ（1801-29）に関する本はドイツ人の医師 Justinus Kerner（1786-1862）が自分の患者について記したもので、1829年に出版されている。当時この本の英語版はないので（英語版が出るのは1845年）、引用部はフラーによる訳文である。（フラーはこの本について *The Dublin Magazine* の書評から知ったと思われるが、同誌には抄訳が出ていたらしい）。

フレデリカ・ハウフェとは、1801年にドイツの Prevorst に生まれ、その生涯のほとんどの期間をいわゆる nervousness に苦しみながら、自ら誘導できるトランス（somnambulism）の状態において予知や詩作の能力を発揮し、宇宙論や神学論を述べたという人物で、29歳で亡くなっている。彼女の主治医のユスティヌス・ケルナーは、フランツ・メスマーの友人であったとも言われ、またマイナーな詩人としても知られていた。彼はフレデリカ・ハウフェについてのこの伝記 *Seeress of Prevorst* を世に送り出すことで、19世紀前半のドイツ・ロマン主義のメスメリズムへの関心を大いに花開かせたとも言われている。

ケルナーの本からの引用とフラー自身の解釈からなるこの予言者のエピソードは、それまでフラーがリーラや Ecstatica において描き出した電氣的身体としての霊媒女性の系譜に連なるものである（“the faculty for prophetic dreams and the vision of spirits,” 96）。フラーは「身体の苦しみと高揚した精神（“bodily suffering and mental exaltation,” 98）」をもつこの女性フレデリカ・ハウフェを、「思考の上で人類がこれまで見なかった地平に到達した（“...had traversed a larger portion of the field of thought than all her race before,” 113）」と表現している。フラーは極度の nervousness によって衰弱した肉体であるがゆえに、当時の「獵場番人の娘」「農夫の妻」としてはおそらく不可能であった精神性（フラーの言葉では “inward life,” 96; “inner home,” 97）と最大限の発達と自由を享受した女性としてフレデリカ・ハウフェを描き出す。いわばフレデリカ・ハウフェという現実の女性としては極限の例からフラーは、女性の生きる領域の社会的な制限、それを生み出すものを見つめようとする。メスマーの友人であった医師ケルナーの言葉の上に自らのメスメリズム体験を浸透させることで、フラーは「電氣的感受性（“electric susceptibility,” 97）に満ちたフレデリカ・ハウフェ像を提示する。フレデリカ・ハウフェの身体はフラーによる、メスメリズムの霊媒に基づく新しき女性の身体像の集大成ともいえるものとなっている。

旅行記 *Summer on the Lakes* の中で、このフレデリカ・ハウフェのエピソードは、それ以外は西部見聞録となっているこの旅行記では際だって浮いた印象を与えている。実際、当時の読者にとって、この“Seeress of Prevorst”に関する部分は突飛な印象を与えるもので、その評判は芳しいものではなかった。それどころかさんざんな非難にあっている。*Summer on the Lakes* の出版直後、これを読んだブルック・ファームのある読者は“Seeress of Prevorst”のエピソードを薦められて読んだものの、「退屈であり関心を惹かない部分」であると述べている。<sup>13</sup> また Orestes

A. Brownson はその書評（1844 年秋）で、フラーの“Seeress of Prevorst”の挿入を「しまりのない、ずさんな（slipshod）」なスタイルだと呼び、「適切な趣味に欠けるばかりか、きちんとした女らしさにも欠けるものだ」と批判している。<sup>14</sup> あまりに散々な評判のせいも、フラーの弟 Arthur Buckminster Fuller は姉の死後、*Summer on the Lakes* を再版する際に、この部分を削除している。

しかし、フラーが霊媒のエピソードを旅行記という conventional な大衆的ジャンルにあえて書いてみせたこと、フラーが霊媒的身体をそれまでのような散文詩や審美的なエッセイの中に閉じ込めるのではなく、旅行記というジャンルの中で初めて同時代の社会的コンテクストの中におき、それを社会との対話に向かって開こうとしたことの中に、フラーのフェミニスト的社會批評を読みとり、それを考えてみる必要があるのではないだろうか。それではフレデリカ・ハウフェという女性像にはどのような同時代のアメリカ社会に対する批評性が見えるのであろうか。

フラーはフレデリカ・ハウフェのエピソードを導入する際、このエピソードを同時代のどのようなコンテクストと対峙させるのか、それをはっきりと書き込んでいる。まず第一のコンテクストは、エマソンである。先述の通り、1843 年から 44 年にかけて、フラーとエマソンの間には、メスメリズムや Fourierism をめぐる考え方の違いについての応酬があり、1836 年の出会い以来、精神的なメンターでもあったエマソンとの関係に緊張が生じていたことが両者の手紙のやりとりから窺える。フラーが Transcendentalist として、メスメリズムをどのように捉えるのか、エマソンへの回答をこの霊媒のエピソードを通じて示したのではないかと解釈できるのである。それはこのフレデリカ・ハウフェのエピソードの中にエマソンを思わせる人物を“Self-Poise”、つまり「冷静沈着な者」という名で作中に登場させていることに現れている。また、これまでフラーが霊媒女性を形容するときには用いていなかった、“aromal state”という Charles Fourier の用語が、フレデリカ・ハウフェに関して用いられていることも、この時期のフラーの関心を反映していると考えられる。*Summer on the Lakes* が出版された 1844 年はブルック・ファームが Fourierism に転向する時期であり、フラーも女性の抑圧という問題をより鋭く取り上げる Fourierism、そして Fourierism の中にあるメスメリズム受容に関心をもち始めていた。<sup>15</sup>

The mind, roused powerfully by this existence, stretches of itself into what the French sage called the “aromal state.” (91)

She [Frederica Hauffe], too, receives this life as one link in a long chain; and thinks that immediately after death, the meaning of the past life will appear to us as one word.

She tends to a belief in the aromal state, and in successive existences on this earth; for behind persons she often saw another being, whether their form in the state before or after this, I know not; behind a woman a man, equipped for fight, and so forth. Her perception of character, even in cases of those whom she saw only as they passed her window, was

correct. (113)

フラーが霊媒に用いた“aromal state”とは、Fourierの用語でメスマーの「普遍的な磁気流体が解放されて、(前世や来世の)人々とのチャンネルが開かれた後にやってくる状態」を意味する神秘的な概念である(“Believing that our souls ‘experience a series of rebirths and transmigrations’ formed ‘by the element we call Aroma’”). フラーがどこで“aroma”というフーリエの概念に関心を抱くようになったのか、それを特定することは難しいが、おそらくブルック・ファームでの経験と関わっているのではないかと思われる。<sup>16</sup>

二つ目にフラーが*The Summer on the Lakes*で意識した同時代のコンテキストとは、旅行記のコンヴェンションである。具体的には“sublime”および“picturesque”という、旅行記で用いられる他者を創出し支配する言説のシステムである。フラーはこの西部旅行は「インディアン」を実際に見ることが目的であったと言っている。そのコンヴェンションをつくり出す伝統的な社会——「移行状態」の西部に対する、「伝統社会」東部——がもつ言説のimperialism、特にsublime, picturesque言説によって客体化されるフロンティアの風景とそこに住む人々、特に「インディアン」の存在はこの旅行記の中では常に意識されている。

それがよく窺えるのがフレデリカ・ハウフェのエピソードの直前に置かれている小話で、それは西部旅行においてフラーのホストであったある白人男性とインディアン男性のエピソードである。フラーがこの旅行記において、当時急速にアメリカのインテリ階級に浸透しつつあった人種科学的な言い回しを用いていることは注目すべき点の一つであるが、彼女が「北方系の血統(“northern blood,” 88)」と呼ぶこの男性は、いつも荒野に行く時は「インディアンのガイド」とともに、酒を持って行くとフラーに話した、という記述が見られる。

He had with him a bottle of spirit which he meant to give him in small quantities, but the Indian, once excited, wanted the whole at once. I would not, said Mr.— give it him, for I thought if he got really drunk, there was an end to his services as a guide. But he persisted, and at last tried to take it from me. I was not armed; he was, and twice as strong as I. But I knew an Indian could not resist the look of a white man, and I fixed my eye steadily on his. He bore it for a moment, then his eye fell; he let go the bottle. I took his gun and threw it to a distance. After a few moments’ pause, I told him to go and fetch it, and left it in his hands. From that moment he was quite obedient, even servile, all the rest of the way.

This gentleman, though in other respects of most kindly and liberal heart, showed the aversion that the white man soon learns to feel for the Indian on whom he encroaches, the aversion of the injurer for him he has degraded. (83-84, emphasis added)

この白人男性がインディアンのガイドを自分に従わせるために使った眼の力——「彼はインディ

アンが白人の眼に抵抗できないことを知っていた」——にどの程度、フラーがメスメリズムの要素を込めているのか、断定することはできない。しかし、*Summer on the Lakes* において終始一貫してインディアンを「滅び行く人種 (“... the power of fate is with the white man, and the Indian feels it.” 83)」と見ているフラーが、彼らを “aromal state” にあると描く霊媒フレデリカ・ハウフェの姿と対照させていることは明らかである。それは、魂の再生と転生を繰り返す霊媒の姿と、衰退の一途を辿る「インディアン」との対照が意図されている。

フラーが「移行状態」の西部 (transition state) という空間に、“aromal” という、これも変化を意味する女性霊媒の身体を重ねてみせるとき、「移行」という宙ぶりの時空間から伝統的な東部社会や既存の女性の役割を批判的に捉えようとする彼女のフェミニスト批評が伝わってくる。またエマソンを思わせる作中人物を “sublime prudence” (「崇高な思慮分別」) と呼んで揶揄することの裏には、エマソンが代表する男性的 Transcendentalism に対する批判という目論みもあったかもしれない。

しかし、西部空間とフレデリカ・ハウフェという女性像の併置は、フラーがそこにアメリカ女性の未来を見ている電氣的な女性像、およびそれを支えるメスメリズム言説の人種性という問題に彼女の目を向けさせることになった可能性もある。フラーの西部体験は、自身のフェミニズム思想を支える白人女性の電氣的な身体やメスメリズムが、マニフェスト・デスティニーの時代にあって人種的他者に対する支配の言説に加担しようという現実を(メスメリズムが可能にする白人女性の精神的・身体的飛翔がネイティブ・アメリカンに対するアメリカ社会の支配言説と共犯の関係にあること)、彼女に意識させたのであろうか、西部という土地空間やその旅行記の執筆はそうした現実社会に対する批評眼を彼女にもたらしたのであろうか。*Summer on the Lakes* は現代の読者に、女性の旅行記というジャンルに現れた女性とマニフェスト・デスティニーおよび帝国主義的他者支配との関わりという問題を投げかけている。

### 情報伝達のテクノロジーとしての霊媒

*Summer on the Lakes* 出版の後、フラーは 1844 年 11 月にボストンを離れ、Horace Greeley の *New York Tribune* の literary writer としてニューヨーク生活を始める。この後さらに 1846 年の 8 月には *Tribune* の foreign correspondent としてヨーロッパへと渡ることとなる。ニューヨーク時代のフラーが相変わらず頭痛治療のためにメスメリストのもとを訪れていたことは、毎朝の “mesmeric apartment” 通いを記した友人への手紙から窺うことができる。またフラーのメスメリズム体験の後日談として、フラーは *Tribune* の記者として女性刑務所や精神病院の改革など社会運動に関わるようになるが、そのために訪れた精神病院で、1837 年プロヴィデンスで出会った霊媒の少女 Loraina Brackett と再会している。

*New York Tribune* 時代のフラーがメスメリズムをどのように捉えていたのか、それは *Tribune* に書いた J. Stanley Grimes という人物によるメスメリズム本 (*Etherology or the Philosophy of*



*Mesmerism and Phrenology*) に関する好意的な書評 (1845年2月17日) から窺うことができる。この記事は書評という体裁ではあるものの、本の紹介よりももっぱらフラーのメスメリズム観を提示するものとなっている。

... such an agent as is understood by the largest definition of animal magnetism; that is, a means by which influence and thought may be communicated from one being to another, independent of the usual organs, and with a completeness and precision rarely attained through these. (Fuller *Life Without and Life Within* 170, emphasis added)

メスメリズムを、「瞬時に、正確に行われる、思考や情報の伝達」のテクノロジーとして見ていたフラーは、それを感度の優れた霊媒の身体を通じて行うことをイメージしていた。フラーは「精神が思考という炎の下で液体となって流れ出し、多くの人々の思考が、パイプオルガンのように様々な音となって壮大な音楽を奏でる社会を夢見て、この書評を終えている (“The mind ... become fluid beneath the fire of thought. We are learning much, and it will be a grand music, that shall be played on this organ of many pipes,” 171)。

フラーが夢見た、テクノロジーとしてのメスメリズムがつくり出す未来の状態——「液体としての思考」とは、思考が電子的な言葉となって流れる今日のインターネット世界を思わせるものだが、「人間と人間の交流が瞬時に正確に行われる」というのも今日インターネットを通じて瞬時に形成されるサイバー・コミュニティのイメージに近いものといえる (フラーが捉えた霊媒の身体は、情報へのアクセスという点で、現代のコンピュータのようなものに相当するともいえるだろう)。1851年のホーソーンの小説 *The House of the Seven Gables* では、霊媒の身体を「望遠鏡 (“telescope”)] に喩える場面が登場するが、これも当時一般家庭に流布していた視覚テクノロジーと情報に瞬時にアクセスする霊媒の身体とのイメージ連鎖を示す一例といえるだろう。

### フラー以降のメスメリズム——アメリカ文学史のなかで

女性の霊媒の身体にアメリカの未来を見ていたフラーのフェミニスト・テキストの中には、男性メスメリストは全く姿を現すことはない。その電氣的資質によって自らトランス状態に至る霊媒にとって、メスメリストは、そもそもその存在が前提とされるものではなかった。しかしフラーの死後、メスメリズムを文学に取り込む男性作家たちは、強大な力をもつ男性メスメリストにのみ焦点をおくようになり、霊媒はそうしたメスメリストの哀れな犠牲者へと転落することになる。ホーソーンの小説 *The House of the Seven Gables* や *The Blithedale Romance* に代表されるように、1850年にフラーが亡くなって以降のアメリカ・ルネサンスとメスメリズムとの関わりにおいて、焦点は霊媒からメスメリストへと移る。そこに描かれる霊媒の姿は弱々しい哀れな存在でしかなく、フラーが描いたような他者やまわりの事象と瞬時に繋がる情報テクノロジーとしての能力、当時形成されつつあ

た電信網で繋がる社会を人間の身体の電氣的神経網のイメージで捉える見方——それに向けられるフェミニスト的関心はかけらもない。そこで消されてしまうのは、生き生きとした女性霊媒の姿だけではない。フラー始めボストンの女性が得た、メスメリズムと女性との豊かな経験もまた抹殺されていくことになる。

興味深いことに、フラーが亡くなった後、エマソン、ホーソーンなど生前にフラーと親交のあった男性作家たちは、フラーの姿をその文学テクストの中に刻むようになる。特にホーソーンは *The Scarlet Letter* のヘスタから *The Marble Faun* の Miriam までの登場人物にフラーのイメージを反映させているといわれるが、そうした男性作家によるフラー描写は、彼女への“mourning”というよりは、“exorcism”（悪魔払い）といった方がいいような趣をたたえている。

ホーソーンの *The Blithedale Romance* (1852) の第5章“Until Bedtime”では、“Miss Margaret Fuller”という名が唐突に現れる。Priscillaが、病床のCoverdaleに手紙を届けるシーンがそれである。胸に手紙をもつプリシラを見て、カヴァーデイルがフラーを差出人と当てるその場面は、フラーが生前催した“psychometric reading”のパロディといえる。フラーへの言及はそれに留まらず、カヴァーデイルがプリシラの中に生前のフラーの姿を見るというシーンも描かれている。

... it forcibly struck me that her air, though not her figure, and the expression of her face, but not its features, had a resemblance to what I had often seen in a friend of mine, one of the most gifted women of the age. I cannot describe it. The points, easiest to convey to the reader, were, a certain curve of the shoulders, and a partial closing of the eyes, which seemed to look more penetratingly into my own eyes, through the narrow apertures, than if they had been open at full width. (51-52)

Oliver Wendell Holmes もまた、1861年出版の小説 *Elsie Venner* (1859年12月から *Atlantic Monthly* に連載された) の中で、メスメリスト的な異様な眼の力をもち、蛇を連想させる少女 Elsie の姿に、「我々の有名なマーガレット」を描き込んでいる。<sup>17</sup>

She narrowed her lids slightly, as one often sees a sleepy cat narrow hers,—somewhat as you may remember our famous Margaret used to, if you remember her at all,—so that her eyes looked very small, but bright as the diamonds on her breast. (101, emphasis added)

虚構のテクストの中に、突然フラーの名前とそのイメージが飛び込んでくることは、テクストに違和感を生じさせるだけではなく、小説テクストをフラー言説のインターテクスチュアリティへと切り開いていくが、ホーソーンとホームズに共通していることは、両者が共にフラーをモデルとしたと目される人物を物語の中で死亡させていること、そして何よりフラーを「眼と首が突出した

不気味で異様な身体」に閉じ込めようとする male hysteria ともいえるその筆致である。

エマソンもまたそうした男性作家による「不気味なもの」としてのフラー表象に参入している。自身が編者となって1852年に出版されたフラーの回想録 *Memoirs of Margaret Fuller Ossoli* では、

... her appearance had nothing prepossessing. Her extreme plainness,—a trick of incessantly opening and shutting her eyelids,—the nasal tone of her voice,—all repelled... (*Memoirs I: 158; emphasis added*)

She was all her lifetime the victim of disease and pain. She read and wrote in bed, and believed that she could understand anything better when she was ill... A lady, who was with her one day during a terrible attack of nervous headache, which made Margaret totally helpless, assured me that Margaret was yet in the finest vein of humor, and kept those who were assisting her in a strange, painful excitement, between laughing and crying, by perpetual brilliant sallies. There were other peculiarities of habit and power. When she turned her head on one side, she alleged she had second sight, like St. Francis. These traits or predispositions made her a willing listener to all the uncertain science of mesmerism and its goblin brood...

She had a feeling that she ought to have been a man, and said of herself, 'A man's ambition with a woman's heart, is an evil lot.' (*Memoirs I: 178; emphasis added*)

上記の引用は、フラーを女性特有の“nervousな身体”に閉じ込めようとするエマソンの意図が見えており、フラーを怪しい流行り科学のメスメリズムかぶれだったと断言している。エマソンが中心になって進めたフラー回想録によって、彼女のメスメリズム体験、およびそれを通じて彼女が到達した革新的なフェミニストの身体観は完全に葬られることとなる。

こうしたアメリカ・ルネサンスを代表する男性作家たちによるフラーの抑圧ないしフラー・パッシングは、ホーソーンの子 Julian が 1884 年に *Nathaniel Hawthorne and His Wife* という 2 巻本の伝記を出版するまで続く。そこでジュリアンは、ホーソーンがフラーについて「欠陥があり邪悪な性格」であったと記した部分を含め、それまでの *Notebook* では妻ソファアによって削除されていたホーソーンとフラーのエピソードを復活させている。ホーソーンから息子のジュリアンへと受け継がれた、「不気味な」なフラー表象は、それがフラーその人のイメージを伝えているというよりは、そうした男性たちがフラーを自らのイメージの演出のために使ったという印象を与える。ある批評家は、「フラーの名声の破壊の上に、自分の父を、アメリカ文学史の中に保存することに成功した」として、ジュリアン・ホーソーンほどフラーの人生と著作を、自らの目的のために利用した者はいないと評している (Mitchell 211)。

ホーソーとフラーの没後のエピソードには、文学者としての名声とキャンノン形成の背景にある政治性が垣間見えている。そしてフラー批評にとって、また19世紀のアメリカ文学批評にとって不幸なことに、こうした男性のキャンノン作家を中心に形成されたアメリカ・ルネサンス史の中でフラーの足跡と貢献が見えにくくなっているといえるだろう。フラーの人生とその思索は、ボストンの進歩的女性たちによる Transcendentalism への参加とその推進、またメスメリズムを Transcendentalism の思想において解釈し、それをフェミニズムへとつなげていく当時の女性たちの姿を代表するものである。フラーが牽引したボストンの“Transcendental women”のアメリカ・ロマンティズムから生まれた霊媒的女性像をインスピレーションとする女性の電氣的身体観、およびそのフェミニズム思想を回復すること——そこからもう一つのアメリカ・ルネサンスの姿が立ち現れるだろう。そのことによって既成のアメリカ・ルネサンス史を修正していくことが必要ではないかと思われる。

#### 注

1. Maria Tatar, *Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature* (1978), Robert C. Fuller, *Mesmerism and the American Cure of Souls* (1982), Samuel Chase Coale, *Mesmerism and Hawthorne: Mediums of American Romance* (1998), Alison Winter, *Mesmerized: Powers of Mind in Victorian Britain* (1998) 等を参照。
2. 例えば、脊椎の病をメスメリズムで治したイングランド、ダービーの女性 Mary Anne Longdon が自らの体験を親族・友人へ伝えるべく出版した手記に現れたメスメリズム受容を参照。
3. メスメリズムは1836年に Charles Poyen によってニュー・イングランドにもたらされる。Elizabeth Peabody が彼の Salem 講演に参加したことについては、Stoehr 38 を参照。ニューイングランドへのメスメリズムの導入については Carlson を参照。
4. Caroline Healey Dall の1852年7月の日記のエントリーに次のような一節がある。“Saturday. July 24th. 1852... I spent the evening in reading Hawthorne’s Blithedale romance. He has played his usual pranks with individuals in the strangest way. Zenobia is a compound of Mrs. Ripley, Magaret, and Mrs. Parks”(Dall 164)。この Caroline Healey Dall という女性は Elizabeth Peabody の秘蔵っ子で、フラーの“Conversations”にも参加し、後に女性の権利拡張運動家となる。
5. 最近のビーボディ姉妹の伝記および研究書としては、Valenti, Marshall, Elbert によるものがある。
6. ヴィクトリア時代の女性の神経的病を「上流階級の病」とする論については、Douglass を参照。
7. 本稿では「霊媒」という言葉を somnambulist の訳語として使用している。霊媒という訳語は原語のもつ意味を非常に狭く限定するものであり、両者は決してイコールではないことを断っておく。
8. 「生命の流体」とはメスマーの用語で、「正体不明の霊妙な流体が宇宙を満たし、それが人体の神経システムにも浸透している」ものである。Tatar を参照。
9. Delbourgo 259-60 を参照。
10. 例えば、Delbourgo による “Sensibility was, in fact, electricity, with pain being merely an accumulation of electricity, in a particular part.” (259) という記述を見よ。
11. 例えば、“Minon is electric” など *Woman in the Nineteenth Century* 中のフラーの表現を見よ。
12. Elizabeth Peabody は自らの身体を “I was a highly magnetised body” と言い、他者を催眠にかける力が備わっていると考えていたという (Stoehr 38)。またソファイアの頭痛を治療した女性メスメリストとして知られる Connie Park も自らを「真の磁気力 (genuine magnetic power)」の持ち主と称していた (Kirby 161)。

13. 例えば、Marianne (Dwight) Orvis は July 7, 1844 の Anna Parsons への手紙に次のように率直な感想を書いている。“He says you must read the *Seherin* [von] Prevorst in Margaret Fuller’s book. I read it, but it seemed to me to be related in a dull and uninteresting manner.” (24)。
14. センチメンタリズムのジェンダー観からテキスト批評と作者批評を混同した Brownson の書評は次の通りである。“Miss Fuller seems to us to be wholly deficient in a pure, correct taste, and especially in that tidiness we always look for a woman.” (Urbanski 146) .
15. Fourierism については、1844 年 1 月にボストンで開かれた Fourier Convention についての Elizabeth Peabody による報告が同年の *The Dial* に掲載されている。“They are acute and eloquent in deploring Woman’s oppressed and degraded position in past and present times...” C.L., “Brook Farm,” *The Dial* Jan. 1844, 357. また Capper 171 も参照。
16. フラーが Fourierism について触れる機会は Brook Farm で開催されたそれについての講演、*The Dial* に掲載された Fourierism についての記事 (1843 年 12 月と 44 年 1 月にボストンで初めて Fourier Convention が開かれ、Elizabeth Peabody による記事が掲載される。April 1844 の号) などが考えられる。またフラーは Orestes Brownson から Fourier の本を借りている。
17. ホームズはフラーについて、「その薄い色の眼には水のような光をたたえ、首は長くグニャグニャしていて、うねるようなくねるような奇妙な動作をした」(“a watery aqua-marine lustre in her light eyes” and a “long, flexible neck, arching and undulating in strange, sinuous movements.”) と述べている (Davis 2000, 201)。

## Works Cited

### Works by Margaret Fuller:

*The Essential Margaret Fuller*. Ed. Jeffrey Steele. New Brunswick, NJ : Rutgers UP, 1995.

“The Great Lawsuit.” In *The Dial* IV. Reprint. Tokyo: Hon-no-tomosha, 1999.

“Leila.” In *The Dial* IV. Reprint. Tokyo: Hon-no-tomosha, 1999.

*The Letters of Margaret Fuller*. Ed. Robert N. Hudspeth. 6 vols. Ithaca: Cornell UP, 1983-1994.

*Memoirs of Margaret Fuller Ossoli*. 2 vols. 1852; Boston: Biblio Bazaar, 2006.

“The New Science, or the Philosophy of Mesmerism or Animal Magnetism.” in *Life Without and Life Within; or, Reviews, Narratives, Essays, and Poems*. Ed. Arthur B. Fuller. 1859; Saddle River, NJ : Gregg Press, 1970.

*Summer on the Lakes, in 1843*. Ed. Susan Belasco Smith. 1844; Urbana: U of Illinois P, 1991.

*Woman in the Nineteenth Century*. Ed. Larry J. Reynolds. 1845; New York: W.W. Norton & Co., 1998.

### Other Sources:

Belasco, Susan. “The animating influence of Discord: Margaret Fuller in 1844.” *Legacy* 20 (2003): 76-93.

Capper, Charles. *Margaret Fuller: An American Romantic Life, the Private Years*. New York: Oxford UP, 1992.

———. *Margaret Fuller: An American Romantic Life, the Public Years*. New York: Oxford

UP, 2007.

Carlson, Eric T. "Charles Poyen Brings Mesmerism to America." *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences* 15. 2 (1960): 121-32.

Coale, Samuel Chase. *Mesmerism and Hawthorne: Mediums of American Romance*. Tuscaloosa, AL: U of Alabama P, 1998.

Dall, Caroline Dall. *Daughter of Boston: The Extraordinary Diary of a Nineteenth-Century Woman*. Ed. Helen R. Deese. Boston: Beacon Press, 2005.

Davis, Cynthia J. "Margaret Fuller, Body and Soul." *American Literature* 71 (March 1999): 31-56.

———. *Bodily and Narrative Forms: The Influence of Medicine on American Literature, 1845-1915*. Stanford, CA: Stanford University Press, 2000.

Delano, Sterling F. *Brook Farm: The Dark Side of Utopia*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2004.

Delbourgo, James. *A Most Amazing Scene of Wonders: Electricity and Enlightenment in Early America*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2006.

Deleuze, J. P. F. *Practical Instruction on Animal Magnetism*. Trans. Thomas C. Hartshorn. 1843; New York: Da Capo Press, 1982.

Douglass, Ann. "The Fashionable Disease: Women's Complaints and Their Treatment in Nineteenth Century America." *Journal of Interdisciplinary History* 4.1 (Summer 1973): 25-52.

Elbert, Monika M., Julie E. Hall, and Katharine Rodier. Ed. *Reinventing the Peabody Sisters*. Iowa City: U of Iowa P, 2006.

Emerson, Ralph Waldo. *The Letters of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Ralph L. Rusk. 6 vols. New York: Columbia UP, 1966.

Fish, Cheryl J. *Black and White Women's Travel Narratives: Antebellum Explorations*. Gainesville, FL: UP of Florida, 2004.

Fuller, Robert C. *Mesmerism and the American Cure of Souls*. Philadelphia: U of Philadelphia P, 1982.

Gilmore, Paul. "Romantic Electricity, or the Materiality of Aesthetics." *American Literature* 76 (September 2004): 467-94.

Grimes, J. Stanley. *Etherology and the Pre-Philosophy of Mesmerism and Magic Eloquence*. 1850; Whitefish, MT: Kessinger Publishing, 2006.

Hawthorne, Julian. *Nathaniel Hawthorne and His Wife: A Biography*. 2 vols. 1885; Whitefish, MT: Kessinger Publishing, 2004.

Hawthorne, Nathaniel. *The Blithedale Romance and Fanshawe*. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1964. Vol. 3 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* 20 vols. 1962-88. Columbus: Ohio State UP, 1964. Vol. 3 of *The Centenary Edition*



- of the Works of Nathaniel Hawthorne 20 vols. 1962-88.
- . *The Scarlet Letter*. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1962. Vol. 1 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* 20 vols. 1962-88.
- Hawthorne, Sophia Peabody. *The Cuba Journal, 1833-35*. Ed. Claire Badaracco. Ann Arbor, MI: University Microfilms International, 1981.
- Herbert, T. Walter. *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family*. Berkeley: U of California P, 1993.
- Herndl, Diane Price. *Invalid Women: Figuring Feminine Illness in American Fiction and Culture, 1840-1940*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1993.
- Holmes, Oliver Wendell. *Elsie Venner: A Romance of Destiny*. 1861; Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1972.
- Kirby, Georgiana Bruce. *Years of Experience: An Autobiographical Narrative*. New York and London: G. P. Putnam's Sons, 1887.
- Longdon, Mary Anne. *Case of Spinal Disease at Derby, Cured by Mesmerism (For Private Use)*. Derby: W. and W. Pike, Corn Market, 1846.
- Manson, Deborah. "'The Trance of the Ecstatica': Margaret Fuller, Animal Magnetism, and the Transcendent Female Body." *Literature and Medicine* 25 (2007): 298-324.
- Marshall, Megan. *The Peabody Sisters: Three Women Who Ignited American Romanticism*. Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 2005.
- Mitchell, Thomas R. "Julian Hawthorne and the 'Scandal' of Margaret Fuller." *American Literary History* 7 (1995): 210-33.
- Orvis, Marianne Dwight. *Letters from Brook Farm, 1844-1847*. Ed. Amy L. Reed. New York: AMS Press, 1974.
- Smith-Rosenberg, Carroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford UP, 1985.
- Steele, Jeffrey. *Transfiguring America: Myth, Ideology, and Mourning in Margaret Fuller's Writing*. Columbia, MO: U of Missouri P, 2001.
- Stoehr, Taylor. *Hawthorne's Mad Scientists: Pseudoscience and Social Science in Nineteenth-Century Life and Letters*. Hemden, CT: Archon Books, 1978.
- Tatar, Maria. *Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1978.
- Urbanski, Marie Mitchell Olesen, ed. *Margaret Fuller: Visionary of the New Age*. Orono, ME: Northern Lights, 1994.
- Valenti, Patricia Dunlavy. *Sophia Peabody Hawthorne: A Life, Vol. 1 1809-1847*. Columbia and London: U of Missouri P, 2004.

Wayne, Tiffany K. *Woman Thinking: Feminism and Transcendentalism in Nineteenth-Century America*. Lanham, MD: Lexington Books, 2005.

Winter, Alison. *Mesmerized: Powers of Mind in Victorian Britain*. Chicago: U of Chicago P, 1998.

Zwarg, Christina. *Feminist Conversations: Fuller, Emerson, and the Play of Reading*. Ithaca: Cornell UP, 1995.